

KANDAI PSYCHOLOGICAL REVIEW

Vol. 1 March 2007

Contents

Original Articles	
<i>Yukishige Nakata</i>	
Client-Therapist Relationship in Japan	(1)
<i>Masashi Kushizaki</i>	
An Introduction to Mutual Watchword Technique	(11)
<i>Tomoko Nagai and Masashi Kushizaki</i>	
The Images of Ijir: A Comparative Study of High-School and University Students	(19)
<i>Toshiya Tanaka, Masashi Kushizaki, Chihiro Akita, Jyunko Ishimoto, Ryosuke Kadoya, Yoko Kira, Mitsue Shingu, Takayuki Nakamura, Yasutaka Nakamura, Chikako Maeda and Tomoka Yasuda</i>	
Quest for Causalities: Practical Three Studies for Covariance Structure Analysis.	(27)
<i>Natsuyo Kawamura</i>	
The Collaboration of School Counselor and Teacher: Getting a Hint from the Negative Feelings of Teachers and Students in Situations of Scolding	(45)
<i>Kie Yano</i>	
Presence-Examination of Psychotherapy for a Mother	(51)
<i>Maki Miyake and Shigeyuki Mathuoka</i>	
Process of the Manner of Experiencing on Understanding the Case Situation: Bringing Therapist Focusing into Helping Professionals	(59)
Book Review	
<i>Ryosuke Kadoya and Masashi Kushizaki</i>	
"Disability and Psychology"	(73)
<i>Takayuki Nakamura and Masashi Kushizaki</i>	
"Handbook of Experimental Existential Psychology"	(80)
Reports	
Summaries of Master Theses, 2005	(83)
Titles of Graduation Theses, 2006	(91)
Information	

THE SOCIETY FOR PSYCHOLOGICAL STUDIES
DEPARTMENT OF HUMANITIES
KANSAI UNIVERSITY

Osaka Japan

文学部心理学論集

第1号 2007年3月

原著論文

わが国の心理療法における関係性.....	(1)
中田 行 重	
相互ウォッチワード・テクニック (Mutual Watchword Technique) の試み	(11)
申 崎 真 志	
意地のイメージ：高校生と大学生の比較.....	(19)
永 井 知 子・申 崎 真 志	
因果性を探る	
—共分散構造分析の実際—.....	(27)
田中俊也・申崎真志・秋田知洋・石本純子・角谷亮介・吉良陽子 新宮光江・中村隆行・中村康高・前田智香子・安田朋香	
スクールカウンセラーと教師のコラボレーション	
—叱責場面で生じる教師生徒の不快感をヒントに—.....	(45)
川 村 夏 代	
プレゼンス—母親面接からの一検討.....	(51)
矢 野 キ エ	
セラピスト・フォーカシングにおけるケース理解の体験過程様式	
—対人援助職とのフォーカシング・パートナーシップ の1セッションからの考察—.....	(59)
三 宅 麻 希・松 岡 成 行	
海外文献紹介『実験実存心理学ハンドブック』.....	(73)
中 村 隆 行・申 崎 真 志	
海外文献紹介『障害と心理学：批判的導入と反省』.....	(80)
角 谷 亮 介・申 崎 真 志	
資 料	
平成17年度修士論文要旨.....	(83)
平成18年度心理学専修第37回卒業論文題目.....	(91)

彙 報

関西大学 文学部 心理学会

文学部心理学会第1回研究大会 報告

平成19年1月13日（土）、関西大学尚文館502教室において文学部心理学会第1回研究大会が開催されました。文学部心理学専修学生、文学研究科大学院生、卒業生、他学部学生、他大学等より、52名の参加をいただき盛会のうち終了することができました。また、総会では、関西大学文学部心理学会会則が承認され、本年度予算状況について了承されました。来年度の研究大会も同様の形式で進めたいと企画していますので、会員の皆様のご参加をお待ちしています。



池見先生 講演風景

プログラム

祝辞 奥文学部長

講演

「カウンセリングと体験過程」 文学部心理学専修 教授 池見 陽 氏

研究発表

「セラピスト・フォーカシングにおけるケース理解の体験過程様式—対人援助職とのフォーカシング・パートナーシップの1セッションからの考察—」 関西大学文学研究科 三宅麻希

「プレゼンス—母親面接からの一検討」 関西大学文学研究科 矢野キエ

総会

懇親会

関西大学文学部心理学会会則

第一条 (名称) 本学会は関西大学文学部心理学会と称する。

第二条 (目的) 本学会は、心理学に関する諸研究、及びその成果をもって社会貢献することを目的とする。

第三条 (事業) 本学会は上記の目的を達成するために以下の事業を行う。

- (一) 研究紀要「文学部心理学論集」を発行する。
- (二) 毎年一回の研究大会を開催する。
- (三) 適宜講演会・研究会を開催する。
- (四) 学内外の研究機関・関連施設等との連携を図る。
- (五) その他上記の目的を達成するために必要な事業を行う。

第四条 (会員の構成) 本学会は以下の会員を以ってこれを組織する。

- (一) 本学文学部心理学専修の専任教員
- (二) 本学文学部心理学専修の学生
- (三) 本学大学院心理学専修の大学院生
- (四) 本学専任教員・非常勤教員有志
- (五) 本学併設校の教職員有志
- (六) 本学文学部心理学専修卒業生有志
- (七) その他学会がその参加を認めた者

第五条 (運営) 本学会には会長・事務局長をそれぞれ一名、幹事を若干名置く。

- (一) 学会の運営は運営委員会がその責を負う。
- (二) 運営委員は本学文学部心理学専修の専任教員とする。
- (三) 会長・事務局長は運営委員会において委員の中から推薦される。
会長・事務局長の任期は二年とし、再任を妨げない。
- (四) 幹事は本学文学部心理学専修関係者から若干名が運営委員会によって推薦される。
幹事の任期は一年とし、再任を妨げない。

第六条 (会費) 本学会の会費は年額三千円とする。

第七条 (事務局) 本学会の事務局は文学部心理学専修合同研究室内に置く。

第八条 (会則変更) 会則の変更は総会での審議によってこれを行う。

補則 本会則は二〇〇七年一月十三日より施行する。

スタッフの活動

(2006年4月～2007年3月)

池見 陽

【教育研究活動】

<学術論文>

池見 陽・河田悦子：「臨床経験が浅いセラピストとのセラピスト・フォーカシングの事例：トレーニング・セラピーの要素を含むセラピスト援助の方法」神戸女学院大学人間科学研究科 心理相談研究 第7号：3-13
池見 陽、矢野キエ、辰巳朋子、三宅麻希、中垣美知代：「ケース理解のためのセラピスト・フォーカシング：あるセッション記録からの考察」神戸女学院大学人間科学研究科 ヒューマンサイエンス第9号1-13.

<学会発表>

Ikemi,A.: Speaking Beyond Speech: Focusing and Focusing-Oriented Therapy in Japan. 2006 International Congress for Psychotherapy in Japan and the Third International Conference of the Asian Federation for Psychotherapy, Tokyo, August 2006

Ikemi, A. & Cornell, A.W.: Felt Sense, Language and the Person (Dialog) 第25回 日本人間性心理学会大会 愛知学院大学 11月

<著書>

Ikemi, A.: The psychological significance and extensions of Autogenic Training, in Kubo, C. & Kuboki, T. (Eds.) *Psychosomatic Medicine*, Amsterdam, Elsevier

池見 陽：「フォーカシングで触れている<からだ>と人が生きる過程」目幸黙僊・黒木賢一 編著 心理臨床におけるからだ 朱鷺書房

島井哲志・池見 陽 編著：「心理学・臨床心

理学入門ゼミナール」北大路書房

池見 陽：「言葉、からだ、こころ：フォーカシングからの観察」四天王寺監修 四天王寺カウンセリング講座6 創元者 6月10日

【学内外の活動】

文学研究科運営委員 (学内)

日本人間性心理学会常任理事 (学外)

兵庫県臨床心理士会理事 (学外)

日本フォーカシング協会会長 (学外)

日本自律訓練学会評議員 (学外)

日本心理学会英文校閲委員 (学外) など

<ゼミ活動>

ゼミ合宿、忘年会、ポーリング大会、メーリングリスト開設など、ゼミ生たちの自主的な活動に支えられ、活発なゼミを行っている。

加戸 陽子

【教育研究活動】

<論文>

健常児・者における幼児用持続的注意集中力検査の発達のおよび加齢的变化の検討

岡山大学教育学部研究集録 (2006) 132, 57-62. (共著)

健常児・者におけるVictoria版Stroop Testの年齢による変化の検討

岡山大学教育学部研究集録 (2006) 132, 63-67. (共著)

<その他>

第33回岡山脳研究セミナー ワークショップ 『神経心理学検査法』岡山大学 7月

第47回関西大学人権問題研究室公開講座『軽度発達障害を伴う子どもの理解と対応』関西大学 10月

教職員カウンセリング研修会『発達障害に関する基礎知識と発達障害をもつ生徒への対応』

神戸女学院中学部・高等学部 11月

【学内外の活動等】

<学内>

人権問題研究室研究員

<学外>

- ・岡山大学医学部・歯学部附属病院小児神経科
心理検査士
- ・大野小児科医院 心理検査士

<所属学会>

日本小児科学会
日本特殊教育学会
日本発達障害学会
日本小児神経学会

申崎真志

【教育研究活動】

<著書>

1. 「地域実践心理学」(実践編)(中田行重と共編著)、2006年3月、ナカニシヤ出版、150頁
2. 「研究論文で学ぶ臨床心理学」(中田行重と共編著)、2006年3月、ナカニシヤ出版、136頁
3. 「高齢者のこころのケア」(曾我昌祺・日下菜穂子編、分担執筆)、2006年4月、金剛出版、全197頁
4. 「くらしに活かす福祉の視点」(宮本義信編、分担執筆)、2006年5月、ミネルヴァ書房、全295頁

<論文>

1. 「クラスター分析で見た意地の4類型：自由記述の比較」(永井知子と共著)『千里山文学論集』(関西大学大学院文学研究科院生協議会)、75、pp.91-100.
2. 「意地尺度(短縮版)の作成」(永井知子と共著)『平成17年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書』(関西大学大学院社会学研究科)、pp.177-187

3. 「日常的支えが主観的幸福感に及ぼす影響」(永井知子と共著)『平成17年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書』(関西大学大学院社会学研究科)、pp.189-202.

4. 「キャンプ療法における運営の工夫」『平成17年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書』(関西大学大学院社会学研究科)、pp.41-48.

5. 「テーマプロジェクト「地域実践心理学」：この一年の経過報告」(中田行重と共著)『関西大学文学論集』、55(4)、101-109.

<学会発表>

1. 「恋愛場面における意地の表現」(永井知子と共著)、日本人間性心理学会第25回大会(愛知学院大学)、個人研究発表

<その他>

1. 「うぬぼれの強い子」、『児童心理』、2006年5月号、97-100、金子書房

<ゼミ活動・テーマプロジェクト等>

3年次の「心理学演習」(13名)、4年次の「卒業演習」(7名)を担当。合わせて20名のゼミ生とともに、一年間をなんとか乗りきった。同じく「卒業演習」(地域実践心理学)を担当。英・国・哲・史地・中・教の各専修から、11名のゼミ生とともに過ごした。

【学内外の活動】

<学内>

人権問題研究室研究員、視聴覚教室運営委員

<学外>

1. 福井県総合福祉相談所・講師(スーパーバイザー)
2. 京都家庭裁判所家事調停委員カウンセリング講座・講師
3. 大阪府こころの健康総合センターリハビリテーション課・講師
4. 摂津市家庭児童相談室・家庭相談員

田中俊也

【教育研究活動】

<著書・辞典>

田中俊也 「児童期（小学生の時期）」 二宮克美・大野木裕明・宮沢秀次編『ガイドライン 生涯発達心理学』（ナカニシヤ出版、2006）第5章、Pp.57-72.

田中俊也 「状況的認知論における学習」 辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修 『教育評価事典』（図書文化、2006）P.106.

<論文・報告書>

田中俊也 2006年3月 「教職科目でのCEAS利用の実態と希望」平成17年度関西大学現代GP成果報告書：進化するe-Learningの展開ー授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化ー 関西大学現代GP推進担当者会議、Pp.31-38.

<学会>

田中俊也 2006年9月 「確かな学びを創りたいー教育実践への3つのアプローチ」（準備委員会企画シンポジウム6 青木多寿子企画・司会、豊田弘司・秋田喜代美・向後千春話題提供、田中俊也・木原俊行指定討論）にて指定討論者 日本教育心理学会第48回総会論文集 S20-21.

<ゼミ活動他>

4回生9名（もともと7名に、海外留学からの帰国者1名、定年退職教員の所属からの移籍者1名）、3回生13名の元気なゼミ生で活動した。夏の合宿は快適な六甲山荘で、冬は例年通り飛鳥での合宿となった。

後期は学内の役職も任期を終え、久々に研究・教育三昧の時間がとれることとなり、院生との「心理学専修コロキウム」での研究を楽しんだり、10数年ぶりに買い換えることが可能となった眼球運動測定具を使つての若いころの研究のスタイルを少し味わった。

また、神戸市の「分かる授業」推進プロジェ

クトのアドバイザーとして、神戸市立魚崎中学校を拠点校とした研究プロジェクトを立ち上げ、院生の演習の一環としても関わっている。初年時は1、2年生の数学の診断的評価を行い、SP表で詳しい分析を行っている。

<講演・その他>

「おもしろ心理学ゼミナール」（関大1セミナー）の講演依頼が相次ぎ、私立の東大谷高校（6月16日）を始め、市立奈良一条高校（7月7日）、兵庫県立須磨東高校（7月22日）、大阪府立交野高校（11月13日）、大阪府立市岡高校（11月18日）、私立城星学園高校（11月20日）、上宮太子高校（12月11日）、大阪府立高槻北高校（2007年1月25日）の8校で、高校生相手の心理学の入門ガイダンスを行った。生徒のみんなの驚きや笑いが広報活動としての効果を感じさせた。

また、8月には母校の中学校に招かれ、2日間の日程で教員、生徒、父母向けのそれぞれの講話を行った。

【学内外の活動】

<学内>

文学部長代理を2006年9月30日まで2年務めた。また、2006年4月より文学部心理学専修の発足に伴って、関西大学文学部心理学会が立ち上がり、初代会長。文学部総合計画会議委員（副委員長）。心理学研究科設置委員会小委員会委員長。

<学外>

神戸市教育委員会「分かる」授業推進事業プロジェクトメンバー、日本学校カウンセリング学会『学校カウンセリング研究』編集委員、日本赤ちゃん学会評議員、認定心理士会評議員。学校心理士。認定心理士。

中田行重

【教育研究活動】

<論文>

1. 「日本に合った対人支援の方法を求めて
—文化風土的な心理療法の試論—」2006年3月、
平成17年度文部科学省学術フロンティア研究
成果報告書、35、41～44
2. 「相談施設の特長による心理面接への影響
—特集を企画するにあたって—」2006年3月、
関西大学心理相談室紀要、7、1-3
3. 「セラピストが研修としてセラピーを受け
ることについて —あるロジャーズ派の視点—」
2006年3月、関西大学心理相談室紀要、
7、45-52
4. 「テーマプロジェクト「地域実践心理学」
——この一年の経過報告」2006年3月、関西
大学文学論集、55(4)、101～109

<著書>

1. 「研究論文で学ぶ臨床心理学」(串崎真志と
共編著)、ナカニシヤ出版、2006年3月

<発表>

1. 「Social Perspectives of Person-Centered
and Experiential Psychology」、2006年7月、
ドイツ、ポツダム、7th World Conference
of Person-Centered and Experiential
Psychotherapy and Counseling

【学内外の活動】

<学内>

コミュニティカウンセリングルーム主任、心理相談室運営委員、心理臨床カウンセリングルーム臨床指導員、将来構想委員会委員（～2006年9月）。

<学外>

1. 産業カウンセラー養成講座講師（長崎）
2. 心理臨床学会第25回大会（関西大学）準備委員

野村幸正

学生の声に耳を傾けながら、また自分の生の声で学生に話しかけながら、「心理学」を媒体にして、教え—学ぶ関係の奥にあるものを模索している。

比留間太白

2005年4月より関西大学人間活動理論研究センター研究員として、近隣小学校において、協働学習のための話し合いの教育的介入研究に取り組んでいます。昨年度は学期中、毎日のように小学校へ通い、担任教員の皆さん協力しながら、トーク・レッスンという授業を開発・実践し、子ども達の学習・発達の様子を観察していました。協働学習中にみられる子ども達のディスコースは、子ども達自身の経験、家庭、教室、学校、地域、日本といった多層の文化・状況の中に埋め込まれています。教室内に協働学習文化を創り出すために、これら社会・文化・状況の影響を記述・分析して、介入していくことが現在の研究課題です。

<訳書>

2006.6 ハリー・ダニエルズ ヴィゴツキーと教育学 関西大学出版部（山住勝広との共訳）

<論文>

2006.3 小学校低学年用Thinking Together Programmeの開発と実践, CHAT Technical Reports No. 3. (若槻健・上野正道・鍋島弘治朗との共著)

<国際会議>

2006.7 Making collaboration in classroom and school through “Thinking Together Programme” The 3rd. International Symposium New Learning Challenges 2005 at Center for Human Activity Theory, Kansai University, Japan.

<学内>

関西大学人間活動理論研究センター研究員

社会的活動

「テクニカル・ライターの会」企画・運営委員

松村暢隆

【教育研究活動】

<論文>

- “Giftedness in the Culture of Japan,” In S. N. Phillipson & M. McCann (Eds.), *Conceptions of Giftedness: Socio-Cultural Perspectives* (pp.345-372). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 2007年2月.

<解説>

- 「才能教育と評価」. 辰野千壽ら（監）教育

評価事典 (p.121). 図書文化社. 2006年6月.

<学会発表>

- 「理科授業で学習困難や才能を示す児童生徒への特別支援の方策に関する研究(1)」(隅田学と共同). 日本理科教育学会四国支部大会(高知大学). 2007年1月.

<科研費研究>

- 「理科授業で学習困難や才能を示す児童生徒への特別支援の方策に関する研究」(愛媛大学・隅田学と共同、松山市の小学校を対象).

【学内外の活動】

- アメリカ教育学会理事 (2004~).
- 講演: 「才能教育の形態と早修の意義」. 香川大学教育学部附属坂出中学校. 2006年12月.

執筆者紹介

中田 行重	関西大学文学部心理学専修教授
串崎 真志	関西大学文学部心理学専修助教授
永井 知子	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
田中 俊也	関西大学文学部心理学専修教授
秋田 知洋	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
石本 純子	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
角谷 亮介	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
吉良 陽子	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
新宮 光江	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
中村 隆行	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
中村 康高	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
前田智香子	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
安田 朋香	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程
河村 夏代	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程後期課程
矢野 キエ	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程後期課程
三宅 麻希	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程後期課程
松岡 成行	関西大学大学院文学研究科教育学専修博士課程前期課程

(非売品)

文学部心理学論集 第1号

2007年3月16日 印刷

2007年3月31日 発行

編集兼発行者 関西大学文学部心理学会

会長 田中俊也

印刷 株式会社 廣濟堂

文学部心理学論集 編集・投稿規程

1. 本誌は関西大学文学部心理学会の機関誌であって、年1回発行される。
2. 本誌は編集委員会の責任のもとに編集される。
3. 編集委員会は、関西大学文学部総合人文学科心理学専修の専任教員から構成される。
4. 本誌には、原著、書評、彙報の欄を設ける。編集委員会の判断でその他の欄を設けることもできる。
5. 本誌に投稿を希望する者は、以下の各項（投稿規程）を遵守すること。
 - ① 投稿は、学会員に限る。なお、特集論文については編集委員会の判断による。
 - ② 掲載の順序、分類は編集委員会が決定する。
 - ③ 論文は未発表のものに限る（学会での口頭発表、ポスター発表、研究会等での発表を除く）。
 - ④ 論文の長さは原則として本誌仕上がり10ページ以内（15,960字。タイトル、文献、図表等すべて含む）とする。編集委員会が特に認めたものについてはこの限りではない。
 - ⑤ 原著論文の構成および表記は、日本心理学会等の学会誌で規定された「投稿の手引き」に準拠したものに限る。
 - ⑥ 当該年度に掲載を希望する投稿原稿は電子的に記録したものに、出力された原稿2部を添えて、当該年度の12月10日までに編集委員会に提出する。
 - ⑦ 投稿論文は編集委員会によって審査され、掲載の可否が決定され、本人に通知される。編集委員会から修正等を要求することもあり得る。
 - ⑧ 論文印刷に関して特に費用を要する分は執筆者の負担とする。
 - ⑨ 執筆者には論文抜き刷り20部を贈呈する。それ以上は執筆者の負担とする。
6. 本誌に掲載された論文の原稿は原則として返却しない。
7. 本誌に掲載された論文を無断で複製及び転載することを禁ずる。
8. 編集委員会の事務局を心理学専修合同研究室におく。

以上

2006年9月1日制定